

ケガレと日本人

日本の時代区分

古墳(4世紀～592年)、飛鳥(592年～710年)、奈良(710年～794年)、平安(794年～1185年?)、鎌倉(1185年～1333年)、室町(1336年から1573年 南北朝、戦国)安土桃山(1573年～1603年)、江戸(1603年から1868年)、明治、大正、昭和

飛鳥時代の実際

豊浦宮、小墾田宮、飛鳥岡本宮、田中宮、百濟宮、飛鳥板蓋宮、難波長柄豊碕宮、飛鳥川原宮、後飛鳥岡本宮、朝倉橘広庭宮、近江大津宮、飛鳥浄御原宮、

藤原宮(藤原京ふじわらきょう)は、飛鳥京の西北部、奈良県橿原市にあった飛鳥時代の都城。日本史上で最初の条坊制を布いた本格的な唐風都城でもある。平城京に遷都されるまでの日本の首都とされた。天皇ごと、あるいは一代の天皇に数度の遷宮が行われていた慣例から 3 代の天皇に続けて使用された宮となったことは大きな特徴としてあげられる。(ウィキペディアより一部抜粋) 首都流転時代

穢(けがれ)

一般に罪(つみ)とともに罪穢という。宗教的な観念で、日常普通のものから区別して、特別なものを神聖視することをタブー-taboo というが、その神聖 sacré といううちにも、また清浄なものと不浄なものとがある。その不浄がすなわち穢であり、これに接触したりすることが触穢である。穢はまた罪とも同一視され、それも未開や古代の社会では全く物質的に考えたもので、何か悪霊の仕業による禍または災とし、これを隔離し排除する。しかも穢はつぎつぎと伝染するが、それに一時的なものと永久的なものとのある。その穢れたものと触れたり、食ったり、似ているとか見聞きしただけでも穢が伝染するとする。その上、その種類にもいろいろあり、病気に関するもの、お産に関するもの、これらは血の穢であるが、そのほか火の穢や五辛のようなものも穢、さらに風雨地震の禍や鳥虫の災、妖怪などの災に関するもの、犯罪や刑罰に関するもの、あるいは外国に行っても穢になるように、外来人や仏法に関するもの、これら普通でない、特別の場合が穢またはその原因とされる。すなわち罪も禍も過も皆同じく穢で、悪霊の仕業と考える。古くはこれをまとめて天津罪と国津罪としている。天津罪は農耕・機織を妨害する罪穢であり、国津罪は当時の社会生活に対する罪や禍・過などを挙げている。すなわち死人と血の穢、きたない病気や腫物など、不義の関係、みだらな行為、鳥や虫の災、不慮の災害などを挙げている。すべてその生活を脅かすもので、その意味で罪であり、禍を及ぼすということで、これを悪霊の仕業とする。その社会の秩序を正しくし、禍を転じて福とすることが、宗教的ないろいろの行為・行事ともなる。すなわちその穢を避け、なくするため、隔離し排除して伝染を防ぐ。これを忌(いみ)という。忌むのは穢の原因を断って清浄にすることで、それも物を払うようにするのは祓(はらえ)であり、また水で垢を落とすようにするのは禊(みそぎ)である。(国史大辞典より)

三貴神の誕生(原文「古事記」)

伊邪那岐命(いざなぎのみこと)は 死んでしまった 奥さんが 恋しくて
黄泉国へ 追いかけて 行きましたが 逃げかえり

「私は、行ってはいけないうちに 行き、見ては いけないものを見て、けがれて しまった。」と言って、筑紫の 日向の 橘の 小門(おど)の阿波岐原(あはぎはら)で、川の中に 入られ禊(みそぎ)を なさいました。

川の中ほどに おすすみになり、水の中に もぐって 身や 心を あらい 清めると、それぞれの ところで、身体や 心を 清める 神々が 生まれました。

つづいて、伊邪那岐命が、左の目を お洗いに になると天照大御神ついで 右の目を お洗いになると月読命さらに 鼻を お洗いになると須佐之男命が成られました。伊邪那岐命は 三人の 貴い神を えられたことを お喜びになり、天照大御神に 首飾りを おさずけになって「高天原」を月読命には「夜の世界」を須佐之男命には「海」を治めるよう、お言いつけになりました。（現代語訳 サイト「神社 mame 事典」より一部抜粋）

その他キーワード

検非違使 けびいし

平安時代初期以降主として京中の非違(ひい)を検察するため設けられた令外官(りょうげのかん)。左右に分かれ、その役所を検非違使庁、略して使庁という。使庁は衛門府(えもんふ)に置かれ、使官人も原則として衛門府官人が兼帯した。最初は職員の数も少なかったが、のちには増員され、検非違使の武力としては、火長身分である看督長(かどのおさ)が京都市中を巡邏(じゅんら)し日常的な警察業務に従っていたが、尉クラスの官人が多数の従者、郎等(ろうとう)を率い、武士団のごとき編成をもって事にあたることがあった。（デジタル大辞泉）

墨(すみ)

菜種油やゴマ油の油煙や松煙から採取した煤を香料と膠で練り固めた物(固形墨)

膠(にかわ)

日本では、主に食品や医薬品などに使われる純度の高いものをゼラチン、日本画の画材および工芸品などの接着剤として利用する精製度の低いものを膠と称している。ゼラチン(英: gelatin)は、動物の皮膚や骨、腱などの結合組織の主成分であるコラーゲンに熱を加え、抽出したもの。タンパク質を主成分とする。

山田浅右衛門(やまだ あさえもん)

江戸時代に御様御用(おためしごよう)という刀剣の試し斬り役を務めていた山田家の当主が代々名乗った名称。ただし、歴代当主には「朝右衛門」を名乗った人物もいる。御様御用の役目自体は、腰物奉行の支配下にあつたれっきとした幕府の役目であつたが、山田浅右衛門家は旗本や御家人ではない、浪人の立場であつた。死刑執行人も兼ね、首切り浅右衛門、人斬り浅右衛門とも呼ばれた。（以上3項目ウィキペディアより一部抜粋）